

# 勝林寺々報

「正信偈」のはなし



をかみしめております。」

「おんぶして外出るとよろこびます。鳥の形を目で追うようになります」

「一生懸命のひをします。大きくなるんだとがんばっています」

しかし石川先生はそんな手紙をもつたびに、むしろ心がくらくなるのです。それは、笑っているのではないことを先生はよく知つているからです。ケイレンなのです。母親がのひをしていると思つてるのは死の前兆の全身ケイレンかもしません。またこの病氣の子の目が鳥の影を追うはずはありません。この子の眼球は定まらないのが特徴です。

しかしこの子は死にませんでした。(一歳二ヶ月になりました) 東大病院によびよせて診察した石川先生は、机からころがり落ちるほどびっくりしたのです。

この子が、ほんとに笑つてゐるのです。

ケイレンでもなんでもありません。

この子が、ほんとに笑つてゐるのです。

なにもかも

合点できているのに

二月のことよみ

一日 成田捷明氏宅祥月

三日 岩出酒一郎氏宅法事・歎森弘道氏宅命日

十一日 勝林寺仏教社年会理监事会並総会

十三日 代議員会

(十四日)~(二十四日)まで住職他出)

二十五日 「みのりを開く会」

二十六日 谷垣逸雄氏宅忌明

二十七日 石田隆男氏宅法事

佛教育社年会

総会開

母を思う葛村光太郎

夜中に目をさましてかじりついたあのムツとする懷のお乳。

「お父さんとお母さんとどちらが好き」と夕暮れの背中の上でよく聞かされたあの路次口。

ノミだけがをしたおれのうしろから、切火をまつて学校へ出してくれる朝。

酔いしれて帰つてきたアトリエに、金くき流のあの手紙が持つていたパリの一夜。

立身出世しないおれをいつでも信じきり、自分の一生の望む

てたあのくばんだ目。

やつとおれのうちの下り段をあがり、

おれの太い腕に抱かれたがつたあの小さなからだ。

そして、今死のうという時の、あの思いがけない権威のある変

はう。

ご門徒の皆様にお願いします。

私達、仏教社年会もようやくその力をたくわえ、

仏教婦人会と共に勝林寺を支え、開法活動にも成果

を挙げるまで成長して参りました。

婦人会がそうであるように、ご門徒の育壯年の方々、全員ご入会をおすすめ致したいと思います。

近日中に地区の理事が、あらためてお願いに参上

いたしますので、どうぞすすんでご入会いただきま

すようお願い申しあげます。

「そのままがせて」と授取してくださいる如来さまのよび声

によびさまされて、「ああ、すでに如来のいのちのなか」と親

子出合のよろこびを得たそのとき、「往生(如来のいのちに生

まれかわる)が定まる」のです。

そして往生走まつたそれからは、如来にいかれたいのちを

晴れ晴れと、約束されたきどりのお淨土へ向つて生きそして死ん

やすらかな、あかるいそのよろこびを、親鸞さまはうたわれ

ました。

生まれた子は頭を三度も手術したのに、余病もおこさずに退院してゆきました。

石川先生のもとへA子さんからしばしば手紙がきます。

「1歳半になりました。笑いはじめました。子をもつしあわせ

たつた一つ

「自分」がわからぬ

でいる人がいる。

なにもかも

合点できているのに

